

クラブ活動での教え合い・学び合いによる自己成長

—サマースクールなどの社会貢献事業の中で—

筑波大学附属駒場中・高等学校 生徒部

高橋 宏和・平田 知之・東城 徳幸

小澤富士男・亀村ひかり・横尾 智治

山田 耕太

クラブ活動での教え合い・学び合いによる自己成長

ーサマースクールなどの社会貢献事業の中でー

筑波大学附属駒場中・高等学校 生徒部

高橋 宏和・平田 知之・東城 徳幸

小澤富士男・亀村ひかり・横尾 智治

山田 耕太

要約

2007年度から2011年度までの5年間、本校が受託した「スーパーサイエンスハイスクール事業」の研究内容の大きな柱の1つとして、「サイエンスコミュニケーション能力を育成する少人数学習の研究と実践」があった。生徒のサイエンスコミュニケーション能力を育成するために、クラブ活動の生徒が指導者となって小学生向けに「出前授業」を実施し、生徒同士の「教えあい・学びあい」を深める活動が行われた。それが「目黒区立駒場小学校サマースクール」であり、2012年度も引き続き実施している。この試みは広い意味での社会貢献活動の一環とも見なされ、さらに年度末の3月に開催される筑波大学社会貢献プロジェクトである「筑駒アカデミア」にもクラブ生徒が参加している。生徒が実際に「出前授業」をしてみて、伝えたい内容の整理やコミュニケーションの取り方についての反省点はあるものの、小学生に楽しんでもらえ、概ね好評価であった。クラブの中での役割を上手に分担し、下級生への引き継ぎを円滑に行うことが、「教え合い・学び合い」による生徒自身の自己成長につながるのではないかと考えている。

キーワード：クラブ活動・社会貢献事業・サマースクール

1. はじめに

生徒のサイエンスコミュニケーション能力を育成するためには、受け身になりがちであった日頃の授業から離れて、生徒同士の「教えあい・学びあい」を主体にした授業ないし活動を実施してはどうか。この仮説をもとにして、2007年度から2011年度まで実施された本校のスーパーサイエンスハイスクール事業の中で、クラブ活動の生徒が指導者となって、小学校向けに授業を実施する試みを計画・実施した。それが「目黒区立駒場小学校サマースクール」であり、2012年度も引き続き実施している。

加えて、2007年度から採択された筑波大学社会貢献プロジェクトで、世田谷区教育委員会との共催・目黒区教育委員会の後援という形で、「筑駒アカデミア」が開催されている。これは、筑波大学・本校教員および生徒・筑駒人材バンク(本校OBで構成される若葉会により設置・運営されている)により、「学ぶ喜びの体験」を目指して開設されたもので、公開講演会と公開講座を行って

いる。公開講座は春休みの最初の土曜日に開催され、その中に本校クラブ生徒が主体となるものと、助手や介助の役割を担うものがある。

もう1つ、2009年度から始まった筑波大学と茨城県久慈郡大子町との連携・協力プロジェクトの一環として、本校の文化祭直後の11月上旬に、本校高校化学部の生徒と筑波大学大学院教育学研究科院生による理科実験教室を、大子町立小学校4校で実施している。実施する内容は、「目黒区立駒場小学校サマースクール」のものと同じである。

本稿では、前2者についてその概要に触れ、生徒のクラブ活動における教え合い・学び合いによる自己成長について考えてみたい。

2. 目黒区立駒場小学校サマースクール

近隣の目黒区立駒場小学校では、夏休み期間である7月末または8月末の午後に、体験的な活動を楽しむ「サマースクール」を実施している。本校からは、2007年度

より生徒が講師を務める、いわゆる「出前授業」の形で参加している。2009年度と2010年度に実施した「出前授業」のうち、クラブが主体となった4講座を紹介する。

(1) 中・高駒場棋院 「レッツプレイ囲碁」

中学1年生から高校2年生までの駒場棋院(囲碁クラブ)の生徒による、小学校1年生から6年生まで20~25名を対象にした、囲碁の初心者指導を2時間ほどの時間をかけて行うものである。

以下は実際の活動記録の1例である。

実施日：2010年7月21日 13:05~14:53

場所：駒場小学校・ランチルーム

参加者：駒場小学校の小学生21名と保護者2名・駒場小の先生1名。

本校からは、中高駒場棋院の生徒11名(高校生6名・中学生5名)、顧問2名、副校長。

参加者に対して、最初に本校駒場棋院顧問からの挨拶があり、続いて本校生徒の代表として高校2年生の部長が簡単な挨拶をした。



まず、参加した小学生(今回の対象は3年~6年)に、これまでどの程度囲碁をやったことがあるか、それぞれの経験を聞いてから、経験者と未経験者の2つにクラス分けをした。対戦中に本校生徒が声かけしやすいように、小学生の胸に名前を書いたガムテープを貼ってもらっていた。

部長から囲碁のルールについてほんの少し説明があった後、小学生らはいくつかのテーブルに割り振られた。基本的に、本校生徒1人にたいして小学生1人または2人の体制で対局指導が行われた。できるだけ多くの関わりを持たせるため、途中で入れ替わって、別の小学生と

も対局した。

本校生徒は、実際に対局しながら小学生にルールを説明していた。初心者には、打つ手筋や打ち方(石の置き方)をいくつかやって示した後、対局していた。ただし、わかりやすいように、対局に使う碁盤は、正式の19×19の升目のものでなく、紙に印刷された9×9の升目のものとした。

対局の仕方は、本校生徒(高校生)1名と小学生2名の場合では、レベルに応じて以下の2通りで行った。

- ① 1人ずつ交互に教えながら対局する
- ② 同時に2人対局する。



ある程度指導が行われた後、本校生徒から小学生に、陣地をキーワードに、勝ちと負けの基準や終わり方を説明し、どう打つのがベストか、考え方や打ち方から手筋について解説していた。

本校生徒(中学生)1人と小学生1人の場合では、年齢が近いせいか、割に上手に教えていた。

最後の方では、さらに小学生同士を対局させて、本校生徒が横からアドバイスを与えていた。



また、保護者の1人は結構囲碁が出来る様子で、とき

おり小学生にコメントしていた。

顧問は、1対1で実力ある小学生を直接指導していた。どうやら、昨年も参加した生徒のようである。

対局の様子を見ていると、本校生徒は教えながら楽しんでいるのがよく分かる。やはり、教えることで学ぶことがたくさんあるのだろう。小学生は、やり方が分かり始めると積極的になってきた。飲み込みが早いには驚かされた。そして、負けるのがやしいので、最後は高校生に2人がかりで挑戦していたテーブルもあった。

最後に、小学生から本校生徒へ、「ありがとうございました!!」とお礼の挨拶があった。終了後に、参加した小学生や保護者に、今回の感想を求めた。

顧問教員のコメントをもとに考察してみる。

駒場棋院では、新入生指導や本校の文化祭での初心者指導などで、多くの生徒が碁を教える方法や囲碁を通じたコミュニケーションの仕方について、既に経験を経てきている。囲碁を学ぶ際の難しさや集中力を維持する困難さを知っているのが、相手の気持ちをそらすことなく小学生相手の初心者指導を行うことができる。ただゲーム自体が難しいため、実際には具体的な場面における的確な指導方法が要求される。小学生に教えることで、そうした場面を多く経験することになり、場面場面における読みの深さや省察という形で、ゲームの面白さが記憶として理解されていくと思われる。

それと同時に、部員同士での教え方についての情報交換や下級生への引き継ぎを通して、教え合い・学び合いができるのではないかと考えられる。

(2) 中・高演劇部

本校の中・高演劇部は、後述する「筑駒アカデミア」の演劇ワークショップにも参加しているが、ここでは小学生にゲームを通して、「安全」すなわち「どうやったら自分の身を守れるか」についての具体的な方法を学ばせた活動記録を紹介したい。実際には、本校演劇部顧問や外部講師による指示を得ながら、演劇部生徒はゲームの進行を手伝ったり、ときにはゲームに加わって、小学生とコミュニケーションを図った。

「こまば あんぜん ファン フェア」

実施日：2010年7月22日 13:02~15:08

場所：本校50周年会館

参加者：駒場小学校の小学生20名と保護者、小学校の引率教諭。

本校からは、本校中学演劇部5名と顧問教員、外部講

師3名。

開始とともに声をかけて、小学生をみんな座らせた後、本校演劇部生徒が起立し、自己紹介(中2・中1)を行った。続いて、外部講師3名の自己紹介があり、最後に演劇部顧問教員より挨拶があった。「これから安全に気をつけてもらいたいためゲームを行う」ことを小学生に伝えた。

駒場小学校の生徒は、保護者の手で、胸に3色(赤・青・黄)のガムテープを貼っていた。

一通り挨拶が終わって、全員が起立し、ゲームが開始された。まずみんなが集まるゲームをした。

最初の質問：みんなの誕生日は？一人一人の誕生日を聞き、「同じ誕生日の月の人で集まってグループを作る」ことになった。1月~12月のグループができ、集まったら座らせた。

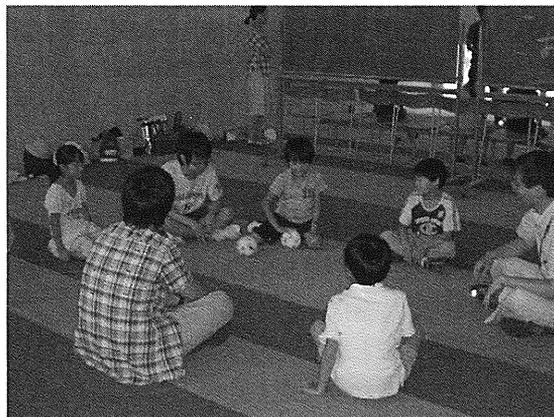
次の質問：自分の名前は？一人一人自分の名前を言い、「名前が同じ文字数の人でグループを作る」集まり方をした。

最後に、「胸に貼ったガムテープの色(3色:赤・青・黄)から、3人違った色の人で集まる」集まり方をした。同じように、「同じ色で4人集まる」、「同じ色の全員で集まる」集まり方も示した。

これ以降、色ごとに別々の場所で別々のゲームを15分ずつ行うことになった。1つ終わったら、別の場所へ移動してゲームを行うようにした。(ゲームは全部で4つ)それぞれのゲームは安全についての「こつ」が入ったゲームで、1つ1つのゲームは、本校演劇部の生徒が教えて楽しませるようにした。

(1)場所：会議室1~小学生は大きな輪になって座り、ゲームの内容を聞いた。

①爆弾ゲーム：目の合った人にボールを転がして渡す。(ボールは二つ使った。)



②ティッシュ落としゲーム：鬼は輪の外側を歩いて回

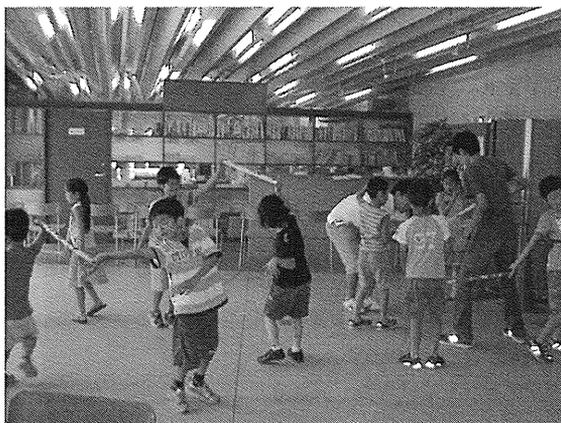
って、誰かの後ろにティッシュを落とす。後ろのティッシュを見つけたら鬼になって、歩いて前の鬼を追いかけ、追いつけなかったらまた誰かの後ろにティッシュを置く。

(2)場所：会議室2～小学生は、一列に並べられた椅子に座り、3つのグループに分けられた。ジェスチャーゲーム(身振りや手振りでも何をしているかを当てるゲーム)をした。

3つの班はそれぞれ役割があり、ジェスチャーをする班、椅子に座ってジェスチャーを当てる班、ジェスチャーをしている班と椅子に座っている班の間で、邪魔をして分からないようにさせる班である。各グループとも順に役割を交代してゲームをした。

(3)場所：ロビー～まずみんな床に座り2種類のゲームの説明を受けた。

①2人で協力して、新聞紙を丸めて作った長い棒の両端を、人差し指の指先で支えて床からゆっくり持ち上げ、回したり跨いだり、いろいろな動きをしてから、再び床にゆっくり置く。



②決められた鬼(本校生徒または講師)が、みんなには分からない誰か2人を捕まえようとするので、その誰かをガードするために、行く手をふさいだり歩き回ったりして、鬼の邪魔をする。(ただし走ってはいけない)

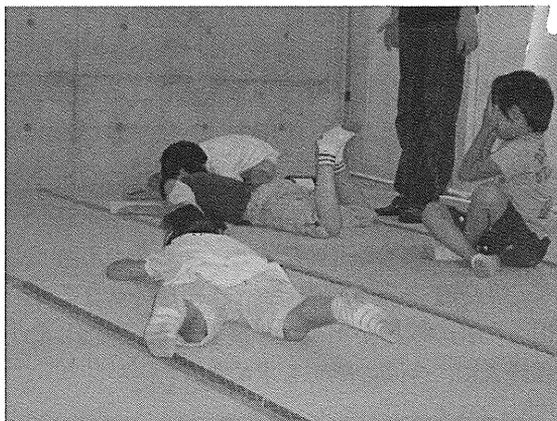
(4)場所：和室～小学生は皆うつ伏せに寝転がり、静かにして、目をつぶらされた。

①30秒間に聞こえた音の数を数え、自分が教えた音の数を答えた。次に、一番高い音、一番遠い音、一番気になった音について質問があり、それに答えた。

②小学生に鉛筆と紙を配った。目を閉じて、1分間に聞こえたいろいろな音の中で、覚えている音を渡された紙に書いた。(例セミの声、自転車のベルの音など)

最後に全体会を行うために会議室に集合した。床に座

った小学生に、「楽しかった人?」という質問に対し、みんな手を上げた。



交通安全の観点から、それぞれのゲームの意味について答え合わせをした。本校生徒が答えを書いた紙を持っていて、小学生が質問に答えられたら、丸めた紙を開いて答えを見せた。

① 爆弾ゲーム(ボールころがし)・ティッシュ落とし・・・「よく見る」ためのゲーム～前をよく見る・後ろや横を見る

② 畳の部屋での音のゲーム・・・「よく聞く」ためのゲーム～自動車のクラクションや自転車のベルなど～ここまでは「安全」について～

③ 棒を使ったゲーム・捕まえる鬼のゲーム・・・「逃げる・つかまらない」ためのゲーム

*丸めた細長い新聞紙の長さは、捕まえることが出来ない距離であることを学ばせた。

④ ジェスチャーゲーム・・・「伝える」ためのゲーム

*周りの人に危険(起こったことや危なかったこと)を伝える。もし声や身振りで伝えられなかったら、「防犯ブザー」を鳴らすことを学ばせた。



サマースクールに参加・協力してくれた演劇部生徒は、小学生の面倒をみよう、教えようと熱心に取り組んでくれた。しかし、実際には、日頃接することのない自分よ

り年少の男の子や女の子の気持ちや反応を想像しながら共同作業(ここではゲームにあたる)をする機会が少ないので、生徒は他人を理解する上でのコミュニケーション力を高められ、多くのことを学んだのではないかと思われる。

(3) 中・高化学部

主に高校化学部の生徒が実験主体の授業の講師を務める形態で「サマースクール」が開かれている。実施にあたり、講師となる生徒全員が全ての実験を行った後で、それぞれの生徒が上手に説明できそうな実験を分担(担当)することに決めた。同時に、実験テキストを作成し、数回の予備実験やガラス細工などを行って当日に備えた。

実験の内容は、後述する「筑駒アカデメイア」でも実施している「ものを分けてみよう」というテーマのもと、身の回りの物質の成分を分離する方法を4つの実験から学ぶことが多い。様々な方法によって混合物を分離できることを体験し、それらの方法が日々の生活のどのような場面で役立っているかを考えてもらうきっかけになればと思って計画したようである。

4つの実験は、「わりばしの乾留」、「半透膜」、「物の吸着〜クロマトグラフィー〜」、「再結晶・過飽和」からなり、そのうちの1つの『実験テキスト』を示す。

『実験1【わりばしの乾留】』

準備：大口試験管、わりばし、細工ガラス管付ゴム栓、ガスバーナー、ピンセット、スタンド、ガスマッチ

実験：①わりばしを4cmくらいの長さに切る。

②①で作ったわりばしを大口試験管に入れて細工ガラス管付ゴム栓で栓をする。

③大口試験管をスタンドにセットする。

※このとき、試験管をわりばしがすべらない程度斜めにセットして、試験管の口が固定位置より低くなるようにする。

④わりばしがあるあたりをガスバーナーで加熱、変化を観察する。

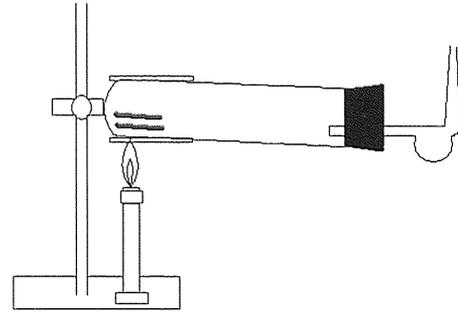
※火加減は各班についているおにいさんたちがやってくれます。

※気体が発生してきたらガラス管の口にガスマッチの火をかざす。

⑤気体の発生がなくなったら火からはずす。

⑥ゴム線はずし、試験管内にできた固体もピンセットで取り出し観察する。

※試験管の口周辺にたまった液体がこぼれないようにビーカーで受けながらやる。



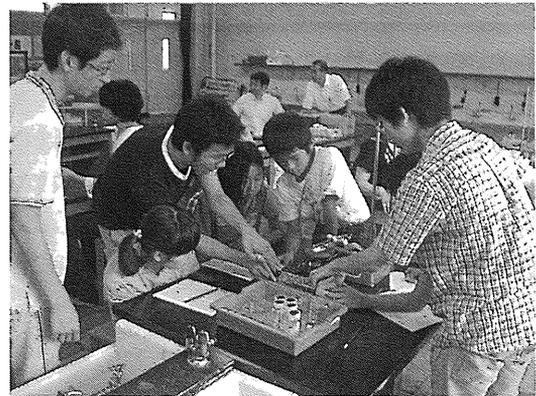
結果：加熱を始めると()色の気体が発生した。

→ガラス管の口に火をかざしたらどうなったか？

反応が終わるころには試験管の口に()色の液体がたまった。

反応が終わったあと試験管の中には()色の固体が残った。

つまり、わりばしは加熱されて()種類の成分に分かれたといえる。



原理：今回行った実験は乾留と呼ばれる操作です。わりばしは木からできていますが、木といっても数々の物質からできています。乾留するとそういった物質を分解したりして複数の成分に分けることができます。

ちなみに発生した気体は「木ガス」、液体は「木酢液」と「タール」、固体は「炭(炭素)」と呼ばれている成分です。

僕たちがバーベキューなどで使う「炭」もこの乾留によって作られています。さりげないところで僕たちの生活に役立っているんですね。

今日はこのような実験をいくつかやって、物の分けかたを勉強しましょう。そしてそれが僕たちの生活のどんなところで役立っているかも考えてみましょう。』

生徒は準備段階から全員が全ての実験を行い、その内容の検討や実験中の安全対策などの検討を行っていた。以前にも講師を担当した経験のある生徒は、準備段階において、小学生にも分かりやすく、論理的な矛盾が生じないように配慮でき、コミュニケーション能力の面でかなりの成長が見られた。それは、前回の経験、たとえば「小学生に対してどこまで話したらいいのか、あらかじめ具体的な答えを用意するべきだったが、その場で考えて対応してしまった。」というような反省があったからである。

「サマースクール」で小学生に教えることの難しさを経験した生徒は、本校の文化祭や「筑駒アカデメイア」などでその経験を活かしていることから、同じ体験を繰り返すことがコミュニケーション能力の向上につながる事が分かる。また、クラブの中での役割を上手に分担し、下級生への引き継ぎを円滑に行うことが、「教え合い・学び合い」による生徒自身の自己成長につながるのではないかと考えている。

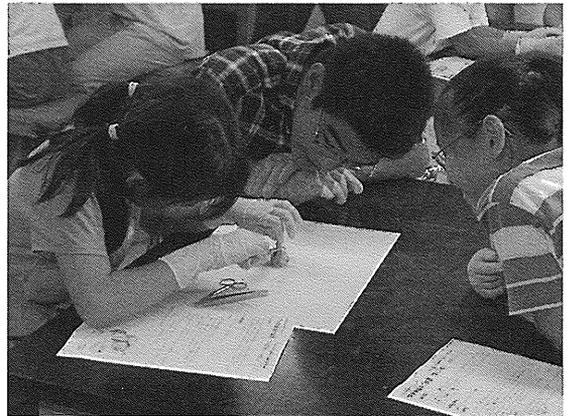
(4) 中・高生物部

中学生が「教える」活動をする機会を得られるように、中・高生物部の生徒による小学生対象の実験講座が2008年と2009年の「サマースクール」において実施された（「筑駒アカデメイア」でも実施している。）。小学生に興味・関心を持ってもらえるテーマで、かつて本校の文化祭で生物部が演じ実験したことがあるもの、夏の暑い時期ではあるが実験材料の調達が難しくないもの、という観点で、「ブタの眼の解剖」が選ばれた。

事前準備として教員から生徒に向けて、小学生を指導する上でのポイントを示された。すなわち、何を伝えたいのか、用語を絞り込んで難しい言葉を減らす、小学生にできる作業とできない作業を区別して手助けをする、実験での安全面を配慮し解剖ばさみなどの器具で小学生がケガをしないように、の4点である。

一方、事前準備として生徒たちが用意したものは、眼球の内部構造を示す説明用の模造紙、配布プリント、おみやげ（葉脈標本のしおり）である。予備実験で眼球の解剖手順を確認し、中1部員を相手に模擬指導（シミュレーション）を行って当日に備えた。

当日は、生物部の代表生徒による簡単な導入と実験のオリエンテーションの後、実験作業に進んだ。動眼筋を取り除かせてから、ブタの眼球の切開を小学生と一緒にやった。さらに水晶体を取り外して、詳しく観察させることができた。最後に高校生が模造紙にまとめた図を用いて、眼球の構造の解説を行い、実験講座の終了となった。



指導に当たった本校生徒の中で、小学生とのコミュニケーションの取り方に差が見られたこともあったが、小学生への説明に使う用語の整理や選択、および代替表現（言い換え）の工夫に気づき、科学のコンテンツ（内容）を的確に分かりやすく伝えることの大切さを理解できてきた。また、上級生からの引き継ぎで、小学生に指導するときのポイントをまとめたプリントが用意されるなど、ここでも「教え合い・学び合い」がうまく機能しているように感じている。

3. 筑駒アカデメイア 公開講座

本校の掲げた中期目標の1つに、「地域社会との連携と協力のもと、開かれた中等教育と地域への貢献を目指す」がある。「筑駒アカデメイア」は緑豊かな駒場を舞台に、筑波大学・本校教職員と生徒・筑駒人材バンク（本校卒業生の人材）により開設された社会貢献事業であり、公開講座の中に本校のクラブ生徒が指導者として、あるいは担当する本校教員の助手や参加者への介助などの役割を果たすものがある。この事業は、2007年度から始まり、2010年度は東日本大震災により中断されたが、2011年度から再開されている。ここでは、2011年度（2012年3月24日（土））に開かれた11の公開講座のうち、以下の2つの講座を紹介する。

(1) 筑駒 Jugglers

「さあ、ジャグラーへの一步をふみだそう」

筑駒 Jugglers は本校の同好会の1つで、日ごろは放課後練習しながら、ボランティアで近隣の商店街のイベントなどで公演をしたり、文化祭の特別参加団体として公演をし、ほぼ毎年大衆賞を受賞するという人気の高い団体である。アカデメイア公開講座の1つとして、生徒が主体となって実施する講座ということで公開している。

当日のプログラムは以下の通りである。

1) 筑駒 Jugglers の公演 (30分)

ジャグリングの技にはどのようなものがあるのか、Jugglers のメンバーが模範演技をしてみせる。

2) 技の指導・練習 (60分)

受講者に、やってみたい道具(ボール、ディアボロ、シガーボックス)を選ばせ、メンバーが具体的に指導し練習させる。

3) 受講者の発表会 (20分)

練習した成果を皆に披露する。

初心者にはコツを呑み込ませるには、ただ説明だけではうまくいかない。しかしまた模範演技を見せるだけでもうまく伝わらない。Jugglers のメンバーにとっても、自分が学ぶのとはまた違った難しさがあり、逆にそれだからこそ、教える側にも勉強になる面がある。たとえば、小学生に教えながら自分でも演技のポイントを再確認できること、一から何かを教えることの難しさを実感したことなどが実施した生徒の感想にある。



受講者を指導する Jugglers の面々

また、単にジャグリングを教えて一緒にやるだけで小学生が笑顔になることからジャグリングの楽しさを実感した生徒、何度落としても夢中に練習しつづける小学生の姿を見ることで、自分も初心を忘れずにジャグリングに励もうと決心した生徒、また、小学生が最初の方で二個のボールもまともに投げられないのを見ていて、一年前は僕もこうだったなあ、腕を交互に動かさないんだよ

なあ、と思い出して自分の技術の上達や成長を確認した生徒など、他人に教えることは、自らも学ぶことを確認できたようである。

(2) 中・高サッカー部

「ブラインドサッカーをやってみよう」

～人と人をつなぐブラインドサッカー～

パラリンピックロンドン大会ではブラインドサッカー日本代表チームがテレビでも取り上げられ、ブラインドサッカーの認知度や人気は上がり、注目されるスポーツとなってきている。年齢や障害に関わらずどのような立場の人とも共に生きる共生社会をめざし、さまざまな人が楽しくふれあえることは素晴らしいことである。

本校の中・高サッカー部は、ふだんの練習に加えて総合学習の時間にも、これまでブラインドサッカー協会や附属特別支援学校との交流を深める活動をしてきた。

「筑駒アカデメイア」の第1回目から引き続き、ブラインドサッカー協会に指導を依頼して本講座が開講されている。今回はさらに、ブラインドサッカー協会が運営するスポ育プロジェクトの協力を頂いて実施した。

講座の指導は、ブラインドサッカー協会から、講師1名、選手1名、スタッフ2名が行い、講座受講者とともに本校中学サッカー部生徒もブラインドサッカーを体験した。

実施した内容はシンプルで、アイマスクをつけ目隠した状態で歩行したり、目隠した状態シュート練習を行うことである。



目隠し状態で恐る恐るボールを把握する中学生

ブラインドサッカーを体験した生徒の感想からは、初めて体験するスポーツだったので「驚き」が多く、新鮮な体験ができたようだった。たとえば、今までとは違うサッカーの楽しみを感じることができたり、コミュニケーション能力や空間認知能力が上がったように感じることができたようである。

顧問教員は、本校生徒を含めた参加者には障害者理解や他者とのコミュニケーション・心遣いをブラインドサッカーからで学んでほしいこと、またブラインドサッカー自体の面白さも感じてほしいことを望んでいる。視覚を抜きにしての全身の感覚を活用した真剣勝負は他にはないので、ブラインドサッカーが広まっていくことでその価値が広がり、多くの人がそこから学び取ってほしいと願っている。

4. まとめ

「サマースクール」の講座を実施した後に、受講した小学生の評価や感想を取ったところ、大変好評であった。教える側の中学生・高校生にとっても、理科であれば安全に配慮した実験の準備、効果的な操作法や観察の仕方、理論の説明方法などを試行錯誤で工夫する過程を経て、自分が指導する内容の本質的な理解が深まった。また、初対面の小学生に指導を試みることで、コミュニケーション能力を鍛えることが出来た。

さらに、クラブの中での役割を上手に分担し、下級生への引き継ぎを円滑に行うことが、「教え合い・学び合い」による生徒自身の自己成長につながるのではないかと考えている。

一方、生徒が指導者となるこのような経験は、一過性に終わっては本当の意味でのコミュニケーション能力の育成や「教えあい・学びあい」による自己成長にはつながらないので、今後も継続して機会を設け、実施することが重要であると考えている。

(文責：高橋宏和)

【参考文献】

- 1) 筑波大学附属駒場中・高等学校編『平成 19(2007)年度指定・スーパーサイエンスハイスクール・研究開発実施報告書』 第一年次 (2008)、p11-14
- 2) 筑波大学附属駒場中・高等学校編『平成 19(2007)年度指定・スーパーサイエンスハイスクール・研究開発実施報告書』 第二年次 (2009)、p11-13
- 3) 筑波大学附属駒場中・高等学校編『平成 19(2007)年度指定・スーパーサイエンスハイスクール・研究開発実施報告書』 第三年次 (2010)、p11-13
- 4) 筑波大学附属駒場中・高等学校『平成 19(2007)年度指定・スーパーサイエンスハイスクール・研究開発実施報告書』 第四年次 (2011)、p11-14
- 5) 筑波大学附属駒場中・高等学校『平成 19(2007)年度指定・スーパーサイエンスハイスクール・研究開発実施報告書』 第五年次 (2012)、p12-14

- 6) 筑波大学附属駒場中・高等学校編『筑波大学社会貢献プロジェクト 第1回筑駒アカデミア報告書』 (2008)、p2-17
- 7) 筑波大学附属駒場中・高等学校編『筑波大学社会貢献プロジェクト 第2回筑駒アカデミア報告書』 (2009)、p34-46
- 8) 筑波大学附属駒場中・高等学校編『筑波大学社会貢献プロジェクト 第3回筑駒アカデミア報告書』 (2010)、p37-50

目黒区立駒場小学校サマースクール（本校関係分）

	実施日	実施内容	関係クラブ
2007年度	8/20（月）	身近な色について調べてみよう	化学部
	8/21（火）	レゴを使って絵を描こう	レゴ同好会
2008年度	8/27（水）	眼の中をのぞいてみよう～ブタの眼の解剖	生物部
	8/28（木）	レゴで数学	レゴ同好会
	8/29（金）	電池の仕組みを調べてみよう	化学部
2009年度	7/23（木）	レッツ囲碁	駒場棋院
	7/28（火）	眼の中をのぞいてみよう～ブタの眼の解剖	生物部
	7/30（木）	ものを分けてみよう	化学部
2010年度	7/21（水）	レッツ囲碁	駒場棋院
	7/22（木）	こまば あんぜん ファン フェア	演劇部
	7/26（月）	身近な色を調べてみよう	化学部
2011年度	7/21（木）	レッツプレイ囲碁	駒場棋院
	7/27（水）	ものを分けてみよう	化学部
	7/29（金）	サッカーで楽しくコミュニケーションしよう	サッカー部
2012年度	7/23（月）	身近な色を調べてみよう	化学部
	7/24（火）	レッツ プレー イゴ	駒場棋院

駒場アカデミア公開講座（本校生徒参加分）

2007年度	2008年3月29日（土）	関係クラブ
	1 演劇ワークショップでコミュニケーション	演劇部
	2 環境地図をつくろう	中学2年生
	3 レゴで数学	レゴ同好会
	4 身近な色を調べてみよう	化学部
5 囲碁を楽しむ	駒場棋院	
2008年度	2009年3月28日（土）	関係クラブ
	1 エンゲキワークショップでコミュニケーション	演劇部
	2 レゴで数学	レゴ同好会
	3 LET'S PLAY “BLIND-SOCCER”	サッカー部
	4 電池の仕組みを調べてみよう	化学部
5 将棋を楽しもう	将棋部	
2009年度	2010年3月27日（土）	関係クラブ
	1 えんげきまんがやってくる	演劇部
	2 ものを分けてみよう	化学部
	3 サッカーの世界を広げよう 人と人をつなぐブラインドサッカー	サッカー部
	4 さあ、ジャグラーへの一歩をふみだそう	筑駒 Jugglers
5 将棋を楽しむ	将棋部	
2010年度	2011年3月26日（土） 東日本大震災により中止	
2011年度	2012年3月24日（土） 次ページ参照	

公開講演会

A 連鎖する中東の政変

講演者: 山川 辰臣 氏 (東京大学大学院経済学系准教授)

2011/10/15(土) 13:30~15:00

人数:200名(抽選)

B 震災後の原子力発電所で産業医として行った公衆衛生・予防医学活動

講演者: 谷川 武 氏 (東京大学大学院農学系附属食品科学センター准教授、産業医、公衆衛生学、予防医学、放射線防護学、労働衛生学)

2011/12/17(土) 13:30~15:00

人数:200名(抽選)

C 発達障がいへの理解と対応をめぐって

-LD・ADHD・高機能自閉症(アスペルガー症候群)の正しい理解-

講演者: 土野 一寿 氏 (筑波大学大学院教育学研究科准教授、発達障害学、発達心理学)

2012/1/14(土) 13:30~15:00

人数:200名(抽選)

公開講座

2012/3/24(土) 開場12:30 開会13:00

1 筆ペンで古典をなぞる

対象: 社会人 20名

2 食べ物から見える世界の歴史

対象: 社会人 20名

3 ネイティブと話そう 英語でコミュニケーション・入門編

対象: 社会人 10名

4 さあ、ジャグラーへの一歩をふみだそう

対象: 小学生5年生以上 20名

5 ブラインドサッカーをやってみよう -人と人とをつなぐブラインドサッカー-

対象: 年齢、スポーツ経験を問わず 20名

6 将棋を楽しむ -対局とプロ棋士による講座-

対象: 将棋を指したことがある人 30名

7 えんげきまんががやってくる

対象: 小学校4~6年生 20名

8 親子でやってみよう 裁判員裁判

対象: 小学校4~6年生と保護者 10組20名

9 身近な色を調べてみよう

対象: 小学校4~6年生 20名

10 目の中を見てみよう -ブタの眼球の解剖-

対象: 小学校5~6年生 20名

11 化石のレプリカを作ろう

対象: 小学生 20名

筑駒アカデメイア

お申し込み

対象: 不問
※お申し込みは必ずお申し込み用紙に、お名前、住所、電話番号、学年、性別、お申し込みの講座名を記入してください。
受付日: 2011.9.5(土)~2011.10.31(日)
受付時間: 2011.10.15(土)~2011.11.22(日)
受付場所: 2011.11.15(水)~2011.12.31(日)
受付時間: 9:00~17:00 (アカデメイア部)
お申し込みは必ずお申し込み用紙に記入してください。
お申し込み用紙は必ずお申し込み用紙に記入してください。

お申し込み用紙 お申し込み用紙 お申し込み用紙 お申し込み用紙 お申し込み用紙	お申し込み用紙 お申し込み用紙 お申し込み用紙 お申し込み用紙 お申し込み用紙	お申し込み用紙 お申し込み用紙 お申し込み用紙 お申し込み用紙 お申し込み用紙	お申し込み用紙 お申し込み用紙 お申し込み用紙 お申し込み用紙 お申し込み用紙
---	---	---	---

筑波大学附属駒場中学校・高等学校

〒154-0001 東京都世田谷区池原 4-7-1
電話 03-3411-8852 (代表)
FAX 03-3411-8977
www.konaba-s.tsukuba.ac.jp

